
リアルサバイバルゲーム

自宅警備兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルサバイバルゲーム

【NZコード】

N8243Y

【作者名】

自宅警備兵

【あらすじ】

ひきこもりがちな主人公一色武は、ある日サバイバルゲームの誘いを受けコンビニで待ち合わせをする。しかしコンビニに強盗が現れ、金ではなく「食料を出せ」と要求する。不審に思う武を他所に、突如如何者かに強盗が突き飛ばされ、事態は一変する。外には血まみれの人々が人を襲っていた。その地獄絵図の様な光景を目の当たりにした武等は、先ほどまでの強盗と協力して、コンビニから脱出した。しかしその先に待っていたのは、自分達に銃を向ける、新たな刺客だった。ゾンビが蔓延する世界で、ひきこもりの主人公と仲間

達が巻き起こす、リアルサバイバルゲーム

外に出たから……（前書き）

初めて投稿します。こちらの作品が処女作ですので、文章や表現など足らぬところがあると思いますが、暖かく見守っていただけた嬉しさです。この作品を機会に、少しずつ不定期ですが、小説活動をしていきたいと思います。

外に出たから……

【強気をくじき弱きを助ける】

そんな正義の味方に、誰もが一度憧れただろう。勸善懲惡の精神で、いつも悪を倒しヒロインを助けるのだ。まるで「感謝の気持ちだけで十分」と言わんばかりに、金も貰わずに去つて行く……

そんなヒーローに僕は憧れていた。

20XX年 東日本 7月26日 午前7時50分

引き籠もりがちな僕、一色武中学三年生はこの日、久々に友達の三人と遊びに行つた。

内容はサバイバルゲーム。なんでも同年代の中学生でサバゲーのチームを組んでいる子達が隣町に居るらしい。その子達と対戦に行くのだ。バスで行くのだが、友達とは一旦近くのコンビニで待ち合わせている。

(早く着きすぎたかな?)

早歩きすぎただろうか?久々のサバゲーで気持ちが高ぶっていたせいだろう。まだ友達は来ていない。

暑い日差しの中、武はコンビニの前をウロウロする。エアガン入りの長いリュックは目立つので店内には入りたくないのだ。人通りの少ない日陰に移動して待つていよう。そう考えて店内に入らず僕は足早にコンビニを離れようとする。

「おーいー武！何処行くの？」

足を止め振り返つてみると、そこには「」の対戦を企画した友達の鈴木隆太が居た。武は鈴木が居ることに安堵した。一人では心許無かつたのだ。挨拶もそこそこに店内に入る。

「隆は店の中にいたのか。気づかなかつたよ」

「普通店の中に居るだろ？「コンビニ集合なんだから。」

「それもさうだけど……その荷物は田立ちすぎじゃない？」

そつと隆の背中を指差す。そこには「コンビニには似つかない銀色で長方形のガンケースが堂々とぶら下つっていた。店内の客の好奇の眼差しも気にしていない。歩くたびにBB弾の音を響かせながら、隆は飲料コーナーへ向かう。

「そんなに田立つてるか？一々気にしてたら街中でアタッショケース持てないぞ」

「いや凄く田立つてる……街中でだつてそんな長方形のケース持つてたら田立つよ」

「そうだな。まあコンビニ強盗とは間違われないにしないとね」

そう言ってスポーツドリンクとレジ前のガムを店員に出す。この間にB B 弾の音はなる。

(面倒起らせず無事に会計を済まして出て行つてくれれば、店員もそんなに気にしないだらつ……)

そう思つていても、僕は早く店の外へ出たかった。ただでさえ外が怖いのだ、下手に注目なんか集められたらまたものじやない。

……薄々気が付いていたが、他の客は余り氣にしていないようだ。

レジで隆が出した十円ガムの一つ一つを、バーコードを読み取つて
いる店員は、若い男性だ。名札を見てみると、山田太郎といつらし
い。平凡な名前だ。それにして

店内に大声が響き渡る！まるで取引現場を押さえた時のようだ、はたまた銀行強盗か、場違いな声量で怒鳴りつける。

「つむつーー！なんですか！？あなたーー！」

僕が声の主を見るよりも早く、店員が答える。

「ラッショだ！！伏せろーーー！」

隆が叫びながら伏せる！

僕は、一瞬頭が真っ白になつたが、状況を把握した。

そこには強盗がいた。

咄嗟に拳銃を見ると、引き金に指を掛けっていない。ズブの素人じやなさそうだ。

格好は帽子にマスクに拳銃。それと大きなバッグを肩から提げている。まんまとラマの銀行強盗だ。金目当ての小悪党か。また、走ってきたのか息が荒い。

生まれてから一度も強盗に巻き込まれた事が無かつたが、あまりにも想像通りの強盗犯に呆氣をとられていた。

しかし、犯人から発せられた要求は、予想とはちがつた。

「食料をだせ！！水もだ！わつとしき！……あいつらが来るぞ！……！」

突きつけられた銃とバッグに、店員は戸惑いながらも、答える。

「…?分かりました!出しますから誰も撃たないで下さい!」

店員は手を上げながらレジ置き場から出る。強盗は固まつたままの僕に拳銃を向け、伏せるように指示する。伏せながら周りを見ると、強盗の指示で、他の数名も隆を真似て、背中で手を組んで伏せていた。

強盗は棚の向こう側へ移動したようだ……

強盗が棚の向こう側に行つたからか、先ほどまでの緊張感は和らいだ。小声で隆に話しかける。

「……いつ時つてパークつて動けないな、本当に一瞬止まつたよ……」

「……映画見てて良かつたよ。まつたく」

二人が小声で話し合つてゐる間にも、強盗の声が聞こえる。

「早くしろよ！その袋にありつたけ詰めり！俺は出口を見張つてる……ちやんとやれよ……！」

「分かりました」

そう言つて強盗は出入口付近を見張る。リボルバーらしい拳銃で外と店員を交互に見つけてゐる。

「……おかしい。おかしいぞ。

「隆ちよつと……」

出口の方へ顔を向けている隆に話しかける。

「ねえおかしくない？」

「なにが？」

「どうして金じゃないんだ？食料なら金で買えるのに」

「分からねえけど……腹でも減つたんじゃねえの？」

「まあ理由はともかく、さつき言つてた”あいつ等”って何だらつ？」

「警察だらつ。それより静かにしとけ……」

そつ言つて隆はまた出口の方へ顔を向ける。

「お二……早くしてくれ……困がれぬが……。」

強盗が叫んだ。落ち着きのない足音が聞こえる

「お、警察が来てるのか、悪いな」

返事が無い。いや、返答を求めるような言葉じやなかつたのだ
が、隆は出口を向いたまま後頭部だけ此方に向けている。

「うむ……おこー見てみるよーあれ！」

隆がびっくりしたような声あげる。しかし出口付近の強盗は隆の荷物で見えない。

「どうしたんだ？何かあつたか？」
「来るぞ……来る！！」

隆はそつと素早く立ち上がり、手を上げる。

――お願いですから!! 何も取りませんから出させてください!!

強盗に負けず劣らずの声量で、隆は手を上げたまま強盗に話す。いきなりなんだ？何があつた？外を見張っていた強盗は、振り返り、隆を見る。

「なにやつてんのー隆ー！」

「お願いしますよー。お願いだからー。」

外から目線を外した突然強盗が此方に倒れこんできた！見てみると、高校生くらいの青年が強盗相手に取つ組み合いをしていた。

「うわあああわわあ……離れる……糞……」

勇敢にも立ち向かった青年は、拳銃には目もくれず、強盗に取つ組み合いをしかける！

尻餅を付きながら、呆然とその一人を見ていると、とつさに隆が手を引っ張り僕をおきあげた！

「見てみろよ……武……」

驚いて突つ立つてゐる僕の肩を叩き、外を指差す。

僕は、強盗と格闘している青年から目を離し、外を見る。

「な……なんだよ！これ……」

そこには、人が人を食らいつき、死に物狂いに逃げ回る、まさしく地獄絵図だった

外に出たから……（後書き）

作品読んでいただき、ありがとうございます。

まだまだ初心者なので、感想やアドバイスなどいただけるとありがたいです。

次回から戦闘シーン等入れていきたいと思います。

また頑張って書きます。よろしくお願いします。

ヒヤッハー！奪え奪えー！（前書き）

今回は少しバトルシーン？入れたいと思います！良かつたら見ていてください！

前回のあらすじ

目の前の光景に、僕は驚いた。

「なんだよーー！これはーー！」

コンビニが強盗に襲われて、何十分も経たない内に、コンビニは囲まれた。

それは警官じゃない。野次馬でもない。マスク/=でもない。

道路の向こう側で起きていたのは、

血だらけの人が、人が、人が、生きた人間を食らう……

それは地獄だつた。

ヒヤツハ――奪え奪え――

僕は驚いた。目の前の光景が信じられない。どうしてこうなった?

「……どうなつてゐの?」

僕は隆に質問する。だが、答えられる分けが無い。これは常識の範疇を超えている。

「おい!あれ……見てみろ

隆が力なく指差す。その先には、腹が裂けている男性が血を撒き散らし、頭が割れ、血まみれの女性が歩いていた。

「あああ!/?嘘だ!歩いてるぞ!――!」

「特殊メイクじゃないよな!/?」

「こんな田舎の街中で撮影なんて!――!」

「おい!――お前ら!――助けてくれ!――!」

恐怖に戦ぐ、僕達の足元で、必死に抵抗している強盗が呼びかけてきた!持っている筈の拳銃は、今は手に無い。

「そつちに銃がある!――弾き飛ばされちまつた!――こいつを撃つてくれ!――頼む!――!」

必死に抵抗している強盗は、拳銃を弾き飛ばされたらしい。

「相手に弾かれてどうすんだよ！？」

「撃つって！？あんた強盗でしょ？助けちゃ不味いだろ！？」

「！」

「違う！？」いつはもう人間じゃない！！！いいから撃て！！！」

必死に抵抗する強盗から発せられた一言が、僕等にこの現状の真実を教えた。

「本当に？本当に化け物なのかよ！？！」

隆が叫ぶ。

「大声出すな！本当にだから！！助けろ！！」

ここまで格闘していた強盗の顔は、血が上って真っ赤だ。しかし、青年は手を止めない。殺す気なのか？高校生らしいその男には、血が滴り落ちていた。

このままでは不味い。僕は棚の下に滑り込んだ拳銃を取り、一步前へ。

「おい武！本当に撃つのかよ！？」

後ろから隆が止める。しかし、撃たなければダメだ。そう心が発している。この相手がなんであれ、目の前の人間を助けなければ。

これは初めて持つ実銃だ。しかもこいつは、公務機関用のニューナンブM60だろ。感激だ。一般人なら永遠に持てない様な銃を、生きてこの手に持てたのだ。しかし今はそれどころじゃない。

少し大きめのグリップを握る。そして撃鉄を起こし、照準を定める。引き金には直前まで指を掛けない。初めての体験だが、モデルガンと同じ操作なので、大丈夫だ。後は当てるだけ。

「撃ちますから頭下げて……」

「分かった！ 撃て！」

強盗の合図とともに引き金を引く。乾いた音とともに田の前の青年の頭部が吹き飛ぶ

筈だったが、頭部はそのまま、丸い銃創が空き、崩れるように倒れた。足元の強盗は死体を横に投げ、深く深呼吸をしている。相当体力を消耗したのだろう。「よくやつた」「ありがとう」と小声で繰り返し、襲ってくる様子は無い

「当たった……こんな反動なのか」「外さないで良かつたな……武」

先ほどまで撃つのを制止していた隆だが、後方から肩を叩き、笑顔で微笑む。

「なんだよ……その笑顔は」「前。見てみる。武」

隆の方へ向き直っていた僕は、改めて隆が指差す方向へ、顔を向けて……

「つ……」ち來てるじゃん……あいつ等……」

そこには、先ほどの数名から、十数名まで増えた、血まみれグチャグチャな奴等が此方にゅつくつと向かっていた。

「騒ぎまくつて呼び寄せた拳句、最後の銃声でここ居場所が判明だ。ここ等典型的なゾンビじゃねえの？……なあ？強盗さん？」

レジに腕を付き、前方を見据えながら、隆が強盗へ話しかける。左手は髪の毛を搔いてくる。

強盗は手を付きながら起き上がると、あぐらをかく。

「ああー。そうだ！物分りのいい奴だな。お前。名前はなんて？」

「隆つて呼んでくれ。そつちは武。あんたは？」

「佐藤でいい。まあしかし、どいつもこいつも皆パニックになつてあいつ等のお仲間になつてやがるのに、お前らみたいなガキンちよが状況把握してちや、警察もビックリだな。」

「ガキだから分かるもんもあるつてことですよ、佐藤さん」

「ああい。さん付けなんて堅苦しいから無しだ。さつきの調子で喋れ」

「分かつたよ。それにしてもまず食料確保なんて、先の事考えてすげな！おっさん！見直したよ！」

「一応30代だがな。まあ、俺はゾンビ映画とかゲームやらを専門とするいわゆるオタク

「どうしてフレンドリーになつてるんですかあ……一人とも……！」

強盗犯佐藤とタメかと思わせるゾンビフレンドリーに喋る隆を叱咤し、前を指差す。

「銃の弾はあと4発です！前の道路を越えて、此処まで来られたらお仕舞いですよ！！」

「お前銃使えるのか？構え方からしてド素人な分けじやないだろ？俺は手首捻ったからお前が使うといい」

「分かりました！早く食料入れる作業に戻つてください！…」

「店員！…終わつたか！？早くしてくれ！…」

「はい！…終わりました！…」

「店員！資材でもパイプでも、武器になる物ないか！？」

「はい！レジに警棒と、あと店の奥に有ります！」

「分かつた！…取つてくる！」

「お前らも固まつてないで手伝え！早く！…」

僕が出口を見張り、新たに道路の向こう側からくるゾンビを警戒する中、食料と武器を店内で調達する係りに分かれた。

先ほどまでの空氣から打つて変わり、店内にいるすべての人間が力を合わせていい。さつきまで帽子にマスクだった強盗犯佐藤も今は両方とも外して、傍からだとリーダー的な筋肉質なオタクのおっさんだ。

「よし！水は大体入れ終わつたぞ！」

「こつちは何入れる！？」

「長期保存の利く奴全部だ！生活用品なんかもいれてくれ！」

「ヒヤツハ一無料じや無料じや！…」

「もつとバツクないの？」

「3個だけだ！選んで入れてくれよ…」

ゾンビ達が迫る中、食料と武器の調達は順調に進んだ。ゾンビ共の足が遅かったのと、先頭集団が倒れたのが幸いした。

「食料に武器、全部出来ました！！」

そう言つたのは、最初に強盗が入つてから、黙々と作業をしていた、レジ店員の山田太郎だった。

「よくやつた……山田とこいつのかーこれからもよろしくー。」

氣分が良くなつた佐藤は、肩を叩き、満面の笑みで握手を求める。

「はい！ がんばつましょー！」

山田太郎は、そう言つと硬く握手をした。たぶんバイト生活で今日初めて心から笑つたに違いない。そう思わせるような喜びよつだ。

「皆さんー裏口がありますので、そちらから脱出しましょー！」

そつ高らかに提案した。

店の荷物を背負い、鉄パイプを持ち、レジの金をポケットに入れたその姿で、田代の恨みを晴らすかのように先陣を切る様子を思い描くと、まさしく現代に蘇えりし勇者といつても過言ではないだろう。

その勇者山田の後に続き、僕、隆、コンビニ客3人、それと佐藤さんが、店を出る計画だ。

コンビニ前の駐車場。その前を横切る道路にゾンビは侵入していた。先ほどよりも少しゾンビが増えている……不味いな。早く行かないと。店の奥へ戻り状況を伝える。

「こへりんじの疋でも、まつやべ此処まで来りやしまよ。こへ

なら早めに

「分かった。今すぐ行こう。既準備いいか？」

佐藤の問いかけに、全員が頷いた。

「うーーー面々ーーー行きますよーーー私の後ろに立つて下さーーー」

コンビニ店員山田の小声の掛け声とともに、僕達はコンビニ裏手の敷地へと飛び出した

ヒヤツハー！奪え奪えーー！（後書き）

一応銃撃のシーン入れましたがどうでしょうか？実を言うと実銃撃つた事無いのです。いろいろ想像で補完していますが、リアルに書けるように次回も頑張ります。

感想・アドバイスよろしくお願いします。

次回は店の外へ出て、一先ず町を探索したあと、誰かの家に行こうと思います。

ドライブの始まりだ！！（前書き）

書きとめていた分、投稿します。今回は短めです。

「ライバーの始まりだー！」

「こぐぞお前等ーー！」

勢い良く裏口から店を出た僕たちは、コンビニ店員山口の指示で、搬入作業に使つていた軽トラに乗つた。

「都合よく車があるとはーーやるな山口ーー！」

「はい！個人経営の「コンビニ」ですか、仕入れも店でやつてゐるんで

すよ

「お前が店長か？」

「いえ！店長はバカансスに行つてますー！」

勇者山田が運転席に座り、助手席に佐藤が座つた。その他は荷台に上り、周囲を警戒する。

「皆乗つたか？」

「はい！OKですー！」

「周り見張つとけーー四も荷台に上らせるなーー！」

「了解した！」

「銃はどうします？」

「温存しておけ！いざとこいつを使つ

「わかりました！行きましょー山田さんーー！」

ハイテンションな山田が、前を見据えながらキーを回し、エンジンを掛ける。

「行ぐぞーーー捕まつてろーーーー！」

「おう! かつ飛ばせ! ! !

「行つけえええ！！！」

山田が運転する車は、搬入所から道路へ進み、大通りへ進む。

「ヒヤッハー！ こんなのをやつてみたかっただんだ！！」

山田が危ないことを見走る。

だ。 隆もはしゃいでいる。 それも仕方あるまい。 また厨房だ。 子供なん

そんな事思つて いる僕も、 実はほしゃいでいた。

ある日突然
知りぬ間に
どんなにもなく非常な出来事が起つた
のだ。

平和な日本で、今までひきこもっていた中で、突如現れたのだ。
初めて実銃に触り、初めて実銃を撃ち、初めて、初めて、

人を撃つた。呆気なかつた。

突然現れた強盗犯の言つとおりに、銃を撃ち、助けた。本当に呆気なかつた。

今思えば、撃つた人がゾンビじゃなかつたらどうしたのだろう。これが、本当の人間で、強盗を捕ま

えるために行つたことだつたどりつたのだろう。

今だから言えることは、あの青年は人間じゃなかつたといつ事。

「山田さん……ホームセンターも行きましょつ……いい物あると思
います……！」

明るい声で提案する。そうすると、佐藤さんが答える。

「おーお前分かつてるなー！偉いぞーー名前、武だつたつけ？」

名前を覚えていたのだと、少し微笑む。

「はーーそうです！」
「よろしくなー！」
「ひつりこそー！」

これから始まる地獄を、まだこの時は感じなかつた。

ドライブの始まりだ！！（後書き）

少し短くなりました。今回は主人公の心情といつゝことで、次回から町を探索していきたいなと思います。

感想・アドバイス等、気軽にコメントしてください。

家族の為、行つて来ます。（前書き）

今回も、戦闘少なかつたかな？本当は銃撃戦を中心に描きたかったんですけど、まだまだ先になりそうです。一応接近戦？鈍器での戦闘もあります。

家族の為、行つて来ます。

一同をのせた車は、搬入口を出て、人気の無い道路に進む。

道中は、特に衝突は無かった。田舎だらか？静かだった。しかし、途中で事故を起こした車両等が疎らにあり、実際にこの異常事態は起きていたのだと認識させられた。

今は田舎町の道路を、右へ左へ走っている。この町は、曲がりくねつた道や坂が多い。

「本当に静かな町だな」

佐藤が呟く。先ほどとは打つて変わつて、真剣な表情をしている。そんな様子を心配したのか、隆が話しかける。

「佐藤のおっさん。どうしたの？ わたままでのテンションは？」

隆が荷台と運転席を仕切る窓を開け、話しかける。「おっさん」でもなく「呼び捨て」でもない「おっさん」といつも葉に親しみを覚える。僕はまださんがいい。何かと田上なのだ。

「ああ……今は、これからのこと考えてたんだよ。……どうやって暴れようか、な」

佐藤さんは、ニヤリと笑つと荷台の方へ体を向ける。

「よつしー。まだ自己紹介終わつてない奴は、順に発表してくれ！ あとは武器の調整だ！ 握り手にテープ巻け！ ちなみに俺は佐藤だ！」

一通り喋ると、また前方へ注意を向ける。ついでまだ名前を知らない人が3人いる。

一人目が自己紹介する。

「私の名前は西野夕。高二の学生です。よろしく」

そう言つてお辞儀をしたのは、コンビニで食料入れの手伝いをしてくれた、女性の西野夕さんだ。見た目は綺麗で、優しそう。サラつとした黒髪が特徴的だ。しかし、手には店にあつたラック用の鉄パイプを確りと持つている。

「俺の名前は高橋健太。高一で剣道やつてます。よろしく」

二人目の彼も、またお辞儀をする。剣道部所属らしい。戦力になりそうだ。手に持つた鉄パイプも、うまく扱えるだろう。

そして最後、三番目の中性が自己紹介をする。

「私は横山一です。38歳で、結婚していて家族がいるんです！家に妻を残したまま、買い物に来ていました！家に戻りたい！戻らせてください！」

どうやら、この横山という方は、家に家族が残つてゐるらしい。そして帰りたいのだと。

様子を見ると、どうやら今まで言つタイミングを計つてていたらしい。鉄パイプを握るその手は、家族への心配と共に、だんだん力強くなつてゐる。

「お願いします！家族を助けたいんです！」

家族を思つ氣持ちは誰でもある。さつと今すぐどこでも行つて、助けてきたいのだろう。話す声が熱くなる。

佐藤さんは、車を停車させ、荷台の方へ顔を向ける。

「横山さん。別に強制してまで、この車で貴方を連れて行こうとはしません。貴方の未来は貴方自身で決めてください。いや決めて下さつていいんです」

佐藤さんはそう言い、車を降りた。そして横山さんの所に向かう。手にした物を横山さんに渡す。

「これは……」

「お守り程度ですが、受け取つてください」

横山さんの手に、確りと渡したのは、ゾンビで入手した、防犯用の特殊警棒だった。

「その短いパイプよりはリーチがあります。また、決してゾンビ達に噛まれずに切られずに、なるべく人が多い所を避けて、警察や駐屯地などに向かってください。ですが、もし建物に人が押し寄せる場合、いくら日本のお警官だつて、問答無用で撃つてきます。その場合は清潔な服を着て、警官個人のところに保護されるようにしてください。確証はありませんが、頑張つてください。」

「ありがとうござります。気をつけます」

「残念ながら、付いてはいけません。我々は今から武器確保に向かいます。いずれ又、どこかでお会いしましょう」

佐藤さんはそう言つと、深くお辞儀をした。その姿からは、先ほど

までの陽気とは欠片もない。

「はい！行つてきます！」

横山さんの声が元気な響く。家族を守る気持ちが、彼を突き動かしたのだろう。駆け足で道を戻る。佐藤さんが、顔を上げたときには、横山さんはもう見えなかつた。

「……酷い話だ」

佐藤さんが呟く。その顔はなんだか申し訳なさそうな、悲しそうな顔だ。前方を見渡しながら、僕達に問いかける。

「こんなのは酷い話だよ。ゲームじゃなく、映画でもない。一人で如何こうできる問題じゃないんだ。家族もいるし、親戚だつて、友達だつて……助け合わないと、この先はやっていけないだろうな。」

「……それがこの人生の醍醐味じゃないですか？」

僕が生意気に答えると、佐藤さんは今までと同じように、楽しそうな笑顔になつた。まるで昨日やり残したゲームを、翌朝また出来るかの様に。

「その通りだ！！行くぞ！！ゲームはまだ始まつたばかりだ！！！」

佐藤さんが助手席へ駆け込むと、勇者山田が止めていたエンジンを掛けた。

「感動のお別れだったが、もう出発だ！！後の二人！夕に健太！よろしくな！！さあ出すんだ！山田太郎！！！」

「一応だけど俺のことは隆つて呼んでくれ！！趣味はFPS！！！」

1

「俺も分かった!!!!俺の口もよみこぐな!!!!」

一分かりましたから、大声だすと敵来ますよ

—コレから先は、田舎町で唯一のホームセンター「カナヅチ」だ！

！敵がウヨウヨいるぞ！－氣を引き締めろ－－！」

「…全員準備よし! 発進してください!」

「つあいしたああああああ！！！行きまあ――ス！――！」

勇者山田が運転する車は、狭い裏道を抜け、町の中心部にあるホーミーセンター「カナヅチ」に向け全速で発進した。

発進して、五分も経たぬ間に、現在まで、合計で十四程度のゾンビが、疎らに攻撃を仕掛けてきた。そしてまた一匹ゾンビが接近してきた。

「FUCK!! ゾンビーだ!! 殴り殺せ!! 一度殺せ!!」

佐藤さんは、先ほど夕さんに助手席を変わり、自ら荷台へ移つて、壯絶なゾンビハンティングを開始していた。

「ねえ！頭狙つたほうがいいって、映画で言つてたけど！」

「タ！よく知ってるな！常識だが偉いぞ！！」

「わわわーーーもつーーー早く倒してーーー。」

「任せろ！！ヒヤツハー！！」

佐藤さんが振り下ろした特製の鉄パイプが、ゾンビの側頭部にクリーンヒットした！ゾンビはそのまま左に吹っ飛び、死んだ。いや一度死んだ。

「つは！－俺が作りし最凶の鉄パイプの味はどうだ－－グリップ強化と手首のランヤードで、すっぽ抜け防止だ－－ひれ伏せゾンビども－－！」

「そつ音につつコンビニから持ってきた使い捨てのウェットティッシュで、鉄パイプを拭う。」

「佐藤さん－それ鎧びちやうんじやないですかね？」

「付いてる血が飛び散つて誰かの目に入るよりはマシだ－－それに武器ならこれから寄り道するスポーツ店で仕入れようと思つてる－－お前なら知つてるだろ？あの店－－」

僕の疑問にあつさつと答える佐藤さん。「あの」スポーツ店にも寄ることも分かつた。

この町のスポーツ店は、実を言つと武器屋なのだ。一応木刀だってボウガンだってスポーツ用品に入るのだが、店長の趣味で、護身用具なんかも置いてある。昔僕が夢見た武器屋の店主を、実際にあの店長は適えたのだ。尊敬して止まない。ゾンビになつてないといいが……

「あともう少しでスポーツ店」ミリシア「だ－－横付けしてりやぢやつと片付けるから、監視張つてくれ－－」

「じゃあ私運搬します」

「あ僕も運搬で」

「お前は拳銃持つてんだから警備してくれ」

（……わざとまで利き手でゾンビ殴つてたじやん。……まあ銃持ちたいからこいか）

「分かりました！警備します！」

「山田と武、健太は車周辺を見張つてくれ。俺と隆、夕は素早く荷台に武器や使えるもんを出来るだけ運搬する」

「じょーかい」

ちなみに「ミリシア」と言つのは、英語で「民兵」の意味らしい。隠す気ゼロで、逆に清清しい。

あと少しの所にある店に向けて、車は安全運転で移動する。実際は緊急時のゾンビ耐久訓練という名のゾンビ狩りに付き合わされて、低速なのだが……

僕は、佐藤さんから貰つたニューナンブM60を弄る。シリンドーラッヂを押し、シリンドラーをスワイングさせる。見てみると、弾はあと4発。空薬莢が一つあり、撃鉄の打撃痕が確りと残っている。空薬莢は今は出さない。暴発防止に役立つといいが、特に意味は無い。丁度刑事物のドラマを見ていて、この銃のモデルガンが欲しくなつていた所だったので、トイガンよりも実銃を先に触つて撃つなんて、本当に感激だ。この銃の採用年数は1960年と言われているので、もうそろそろ他の新しい銃と順次交換されていると噂に聞いていた。本当だとしたらまさに今、警官か皇宮護衛官、海上保安官等に入らないと、永遠に撃てなくなつてしまつ。日本の公務機関専用だから、海外の屋外射撃場では撃てないのだ。しかしそれを覆し、今この場で持つてはいる。佐藤さんの話によると、倒れていた警官から取つたらしい。頭からガツツリ食われていたため、ゾンビ化の心配は無かつたみたいだ。それにしても、その警察官はどうしてこの拳銃を使わなかつたのだろうか？使う暇が無かつたのか？それとも……

「よし！店は目の前だ！！皆準備してくれ！！」

佐藤さんが呼びかけて、ハツと我に返る。こんな時考え方をしていたら、注意不足で敵に殺られてしまう。

氣を引き締め、周囲を警戒する。そうしたら、店の目の前に到着した。久々のミリシアだ。ガラスの壁に「デカデカ」と「護身具、防犯グッズ販売中！」という張り紙がある。

「着せましたよー。皆さん！」

勇者山田、店内での紳士オーラを放ち、にっこり微笑む。営業スマイルの様な本気の笑顔に、元気を貰つた一同は、あらかじめ決めた役割を実行する。まず僕は警備担当だ。荷台の上に立ち、周囲を見渡す。健太さんや山田さんも一緒だ。その他のメンバーは、佐藤さんを先頭に店内へ進入する。

「た……助けてくれえ……」

突然、店内から助けを求める声が聞こえた！ 荷台に立ち、ガラス製の扉の中を上から覗く。

そこには、会計口の下で、ゾンビの手を掴み、噛まれない様に必死に格闘している店長の姿があった！！

僕はとっさに荷台を飛び降り、拳銃を構えながら、店内へ突入した

家族の為、行つて来ます。（後書き）

またこんな様な展開で、次回へ続きます。始まつたばかりで、戦闘シーンも少ないですが、感想・アドバイスなど頂けると、嬉しいです。またそれを糧に、よりいつそう頑張って書けますので、どうぞよろしくお願ひします！

店長おーーー！（前書き）

今回は主人公武が通うスポーツ店という名の武器屋に、突撃します。また、ぶつ通しで書いてるので、誤字や読みづらい所があったら、その都度編集していくと思つてます。

店長お……！

「た……助けてくれ……！」

店内から、助けを求める声が聞こえる。荷台から見たら、会計台の下でゾンビと格闘している店長の姿が見えた。襲い掛かっているゾンビは、背中から骨が見えている。

「店長お……！」

僕は、荷台を飛び下り、拳銃を構えて店内へ突入した。

「大丈夫ですか！？店長！？」

佐藤さん等が囲む中を掻き分け、会計台に登り、店長を襲っている奴に銃を向ける。

「撃ちますから、血が入らないように、目を瞑つて抑えててください！」

「早くやつてくれ！」

僕は、店長を襲うゾンビに照準を合わせ、引き金を引く。店内に大きな音が鳴り、弾丸はゾンビの頭に命中した。ゾンビは血しづきを後ろの壁に塗りつけ、動かなくなつた。店長がゾンビを横へ投げる。

「はあ……はあ……ありがと。助かった。君は、この前來てくれた子だね……ありがと。」

店長はそういふと、レジから出て椅子に座る。覚えてもらえてたん

だ。ちょっと感激する。たまにでも通つてみるものだ。

「ああ……何なんだ？いつたいこれは……薬品会社なんかが作ったのか？」

店長は汗を拭い、僕たちを見渡す。どうやら、ゾンビと言つ事は分かつてゐるらしい。

「はい。そうです。この町にはゾンビがいます。そして多分世界中にも」

「なんだつて……本当にゾンビがいるのか？じゃあ大変じゃないか！日本にはまともに銃もないぞ！？自衛隊だつて足りないし、警察官なんて当てにできない！世界までそつなら、一体どうすればいい？」

店長は狼狽する。さすがにオタク気質だけあって、飲み込みが早い。ゲームや映画の警官が役に立たないのも、分かつている。実際、真っ先に壊滅するのは病院か警察だらう。人が集まつて混乱し、機能しているのも時間の問題という所だ。店長を救つてから、外にいる二人も中に入つてきた。銃声を聞いたからだらう。

「大丈夫ですか！？」

「大丈夫だ！心配ないから警備していくれ！」

分かりましたと頷くと、山田さんと高橋さんは外へ戻る。

「……世界、……そうだ、テレビをつけてくれ。情報が欲しい」

店長はそう閃くと、レジの奥にある薄型テレビをこちらに向けて、電源をいれた。

「ザア……ええ！」ちらり汐留のテレビ局ですー！」覗ください！！目の前にいる、暴徒と化した市民が、警備員を襲っています！！！まさに地獄絵図です！！暴力によつて我が汐留第三テレビ局の職員に負傷させています！！！あつ！！見てください！！！暴徒の一人が職員に噛み付きました……こっちに来ます！！！！！……暴力は止めてください！！！やめ キャア！！！！！ああああああ！！！ザザザザザ……」

皆が固まつた。佐藤さんはテレビ食い入り、目線をそらさない。店長は手で顔を覆い、うな垂れている。

「おい……剛くん。これって不味いんじゃない？」

店長が佐藤さんの方へ向かつて囁く。剛、と言つのは佐藤さんの名前だらうか？

「こいつは不味いですよ。マスクはまだゾンビの存在を認識していない。政府もまだ非常事態宣言すら出していない。これは被害が大きくなりそうだ……」

佐藤さんが神妙な面持ちで答える。どうやらまだゾンビその物の存在を公表していないらしい。ヤバイぞ……これでは本当に病院に感染者が押し寄せ、警察署にはゾンビが連行され、ライフラインを司る重要な医者が、安全を確保し、法を守る警察官が全滅してしまつじゃないか！

「佐藤さん！大変です！銃声を聞きつけてゾンビ共がゆづくづくこっちに来ています！！！」

「不味い！マスター！」の店の物持つて行つてもいいですか！？

もちろん貴方もご一緒に！」

「つ、ん……分かった！！命には代えられない！！皆手伝ってくれ
ー！」

店長はそう言ってポケットから鍵を取り出す。

「ここで使えるのは、木刀に警棒、あとはナイフ類だ！飛び道具はレジの奥に保管してある！！」

「よし！ちゃちゃっと荷台に詰め込め！！！木刀は何本あっていいぞ！！替えが利くと便利だ！」

「これがボウガンだ！矢もあるから、全部持つていこう！…軽犯罪法は今は無効だ！！！」

店長が取り出した、ボウガンが入った箱が山積みになつた台車を、僕は外へ運ぶ。

外に出ると、左右両方からノロノロとゾンビ達が迫ってきていた。素早く荷物を運ばねば！

「これをそつちに！」

「OK分かった！」

初めて夕さんと会話した。しかしそんなこと考えている暇はない。黙々と運送する。行つたり来たりを2回ほど繰り替えし、すべての荷物を運び終えた。

「もうこれで最後だ！皆車に乗れ！！山田と夕は車の中！その他は荷台でゾンビを車に近づかせるな！マスター行きますよ！！GO！GO！GO！GO！」

佐藤の掛け声とともに、6人はそれぞれ車に乗つた。

「俺と武でゾンビを牽制するから、マスターと隆はボウガン組み立ててください！…」

「様になつてゐなー剛くん！分かつた任せてろ…」

「山田あ！一旦ホームセンターで武装を整える！種と土も貰つて行く…その後はクルーザーでも奪つて事が収まるまで自給自足でもするか…！発進しろ…！」

「分かりました…！行きマース…！」

一同を乗せた車は、店の前を出て、ホームセンター「カナヅチ」へ向かう。途中、道に倒れている青い服の男性を見つけた。作業着ではなく、帽子もしている。…もしかして…！

「止めてください…！警官です…！」

「なに…？何処だ……！」

「そここの木の下の所に倒れていました…！銃があるかもしれません……！……取つてきます…！」

「ちょっと待て！危ないから鉄パイプ持つてけ！死んでても試しに一回殴れよ…！」

「はい…やつてみます…！」

そう言つと、僕はまたも荷台を飛び降り、拳銃を構えながら、倒れている警官に駆け寄る…！

「大丈夫ですか…？生きてますか…？…よつしゃ死んでる…！」

一瞬危ないことを口走つてしまつたが、気にしない気にしない。仰向けに倒れている警官は、首から血を流している。佐藤さんの言い付け通り、鉄パイプを思い切り振り下ろし、顔に当てた。

死んでるからだろ？頭がグラグラしている。首が折れたようなので、これで襲われる心配はない。我ながら酷い事したな……そんな思いは、ホルスターの中にある物で吹っ飛んだ。

「ぴ……P230！？日本モデルだからJPか！？凄い……こんな田舎町に配備されているのかよ！……！」

あまりの事に心が躍る！…てつきり、今もつているのと同じ、二コ一ナンブM60か、よくてもM37エアウエイトかと思っていたが、これはオートマチックだ！SIGから輸入している、日本向けモデルだ！これもやはり、トイガンを見るよりも早く、実銃を見た。そして触った。

あと、自分が思っているだけだろ？か、一応ここは政令指定都市だつた。中心から離れているだけか。チチ田舎だ。

僕は、警官の腰から付いているランヤードを外し、ついでに警棒と手錠を取って、急いで車に戻った。

「戻りました！出してください！…！」

「了解」

山田さんが車を出す。座っている足元を見ると、完成しているボーガンが五つあった。

「ボーガンがこれだけあると心強いですね」

「ああ。今週はあまり売れなくて、丁度残ってたんだ。ラッキーだつたよ」

「武一警官は何持つてたんだ？」

「P230JPです！8発入るオートマチックですよ！…あとは警

棒と手錠ですね」

「おお！すげえな！！大量じゃねえか！警棒と手錠まで持つてくるとは！俺は拳銃取つただけだったからな。取れるものは取つたほう

がいいぞ」

「はい！分かりました！」

「おい武！俺にも見させて！」

「分かった。隆」

「隆くん。そつちの金具取つてくれないか？」

「これ？」

「ああそれそれ。ありがと」

「それでさあ隆。聞いてるの？」

「ああ」めん「めん

「うして僕たちは、ホームセンターへ向け車を進めた。

お問い合わせ……（後書き）

感想・アドバイス等、待っています！よろしくお願いします！

獣銃を片手にロボットカー乗つてている生徒がいる東高校には死んでも行く気にはな

いつも。グダグダですが、一応ホームページセンターはあと少しです。ちなみにタイトルの東高校は存在しませんので、もし同名の高校がありましたら、そちらの高校とは全く関係ありませんので、悪しからず。

また、修正点がありましたら、見つけ次第修正していくと思います。

獵銃を片手にDODGEカー乗っている生徒がいる東高校には死んでも行く気にはない

店長を乗せ、計七人となつた僕達。道を大通りから外れて、裏道へ入つた。倉庫等の建物が密集している。元々ただつ広い土地なので、駐車場等が沢山ある。

こつちの方は近道だ。ゾンビ共も少ないだろう。僕は拳銃を握り締め、周りを警戒する。

「本当に、現実に起ころとはな……失踪事件や獵奇殺人は前兆だったのか？」

一通りボウガンの組み立てを終えた店長が話す。確かに先週あたり、登山客が失踪したり体中を食いちぎられた死体などが見つかっていた。犯人はまだ捕まつておらず、TVの特番をどこの局も放送していたつづけ。

そんな事を考へて、僕らの車は平原に出た。この隣は山で、そこには寺があった。ここはその山の敷地内の平原に面していいる道路だ。ここにはよく友達と遊びに来ていた。

「誰がこんな事を？まさか医薬品会社が秘密裏にウイルスを作ったとか？」

「あるいはどつかの国の生物兵器なんかか？こんな事するのは変態科学者しかいねえよ」

「いや、もしかして宇宙から来たミクロの宇宙人とか？脳みそ操つたりして！」

「それは有り得ないだろ？ どつかの資料で、宇宙人が攻め込んでくるか、ゾンビ発生するかで

佐藤さん等が話し合ひうが、答えなど分からぬのが現状だ。分かつたのは、ゾンビは映画と同じく、頭が弱点だと言つこと。そして、日本のTV局の情報によると。全国、全世界にゾンビが発生していると言つことだ。

「何にしても作れるとは思いませんよー」と言つた作る意味が分かりません！こんな惨い事！」

運転席の夕さんが答える。走行中からか、感情からか、声も大きくなる。

「やうだな。こいつ事態になつて、どつかの誰かが喜ぶなんて考えられない。作つたにしても大企業か、それを支援するにも政府機関が関わつてゐるだろ。しかし、これを作つた誰かは、何時かはこいつを使うつもりだつたんだよ……そのために作った。まあこんなだけの範囲で蔓延してゐんだ。作つた奴も関係者も無事では済まないわ」

店長は淡々と喋ると、手に持つてゐるボウガンに矢をセッタする。

「Jの状態から、政府は何かしてくれますかね？」

佐藤さんは嫌みつたらしく笑う。

「やうだな。この状態を開けたら、総理に票でも入れてやるかな」

店長も鼻で笑う。今の政府に出来る事なんて限られてゐる。

皮肉だが、近年国会で決定した、自衛隊人員削減に加え、警察官による相次ぐ拳銃の紛失、乱用（市民目線らしい）に伴い、よりいつそうメディアから非難され、ますます拳銃の使用が難しくなっている。これのせいで一体どの位の警官が拳銃の使用を躊躇つたのだろうか。

「せめて銃器店が有つたらなあ……銃社会でもないし、ヤクザでもないと弾も補充できませんよ」

僕はそう嘆く。いくら拳銃一挺あつたって、弾がないと意味が無い。今まででは至近距離だつたから良かつたものの、今後どう状況が変わらか分からぬ。少なからず弾も外し、消費するだろう。

「獵銃は？それなら店があるんじやないか？」

「そんな都合よく店がありま……うおー！」

突然、乾いた音が周囲に響き渡る……

「キヤアあ！……」

銃声だ！…車の側面に弾丸が当たつている……

「頭下げる！……」

佐藤さんの声で、皆一斉に頭を下げる。どうやらこっちを狙つて撃つたらしい。荷台に置いてあつたダンボールに穴が開いていた。

「なんだよ！…いきなり！…」

「どうからだ！…こっちに向かつて撃つてきたぞ！…」

「いいから止まるな！…狙い撃ちされる！…」

「ホームセンターまで突っ走れ……！」

次の銃弾が発射されるよりも前に、車は開けた土地からまた住宅地へ入つていった。

「糞つ……どうして撃つてきた……！」

店長が叫ぶ。手に持つたボウガンのグリップを、強く握り締めている。

「助け合つよりも、力で奪い取る。そういう考え方の奴もいるんですね。じうじう世界になつてくるね。マスターだつて最初から分かつてたでしょ？！」

佐藤さんがボウガンで周囲を警戒しながら、淡々と答える。店長はただただ歯を食いしばる。

「ああ……クッソ！ やつぱりあいつ等だ」

高橋さんは頭を抑える。

「あいつ等はじり辺で有名な不良ですよ。東高校のヤクザともつるんでこるつて噂です」

「健太はどうして分かつた？ 撃つた奴が見えたのか！？」

「違います。あいつ等のド派手な車が山の所に駐車してありました

……」

「銃はどうして？獵師から盗んだのか…？」

「たぶん鉄砲店から奪つたんだと……」

「糞つ……」

佐藤さんは床を殴る。面倒な事になつた。東高校と言えば不良が多い、いわば「ランクの高校だ。このまま引き籠もつていたら、東高しか行けなくなると、危機感を感じていたところだった。それなのに今じゃ獵銃片手にDQNカーを乗り回す、不良の粹をこえた野郎共がのひばつてゐる。絶対に行きたくなくなつた。

「僕等の田的地區に来なけりやいにんですね……」

僕がそう呟くと、高橋さんは「やうだね」と心無く呟く。

(それほどたちの悪い連中なのか？)

今はまだ、あいつ等の脅威は感じていなかつた。過信といひつだらうか？それに近かつた事を後悔するはめになるとは、この時まだ知る由も無い。

「嘘やんー田的地区にましだあー。」

夕さんの元気な声と共に、この町最大のホームセンター「カナヅチ」が目の前に現れた。

獣銃を片手にロボットカー乗っている生徒がいる東高校には死んでも行く気にはな

感想・アドバイス等、良かつたら書いていてくださいね！

駐車場での散弾銃の使用はお止めください。（前書き）

今回、ホームセンターに着いた武等一行は、一先ず偵察を始めます。
新キャラといつぽどの人はまだ出ません。

誤字・脱字は、見つけ次第修正していきますので。

駐車場での散弾銃の使用はお止めください。

この町最大のホームセンター「カナヅチ」前に到着した僕達は、一
先ず車を陰に隠して、外から中の様子を確認する

「どつですか？誰かいますか？」

高倍率の双眼鏡を使い、店内を偵察している店長に、佐藤さんが話
しかける。

「……人は見当たらないな。いるのはゾンビと……死んだゾンビだ
けだ」

「えつと……ゾンビが動いている方で、死んだゾンビが動いてない
方ですか？」

「ああ。一度死んだ方ね。把握把握」

「……いやあ？あれは人間が死んだ奴かな？血が壁に飛び散つてい
るから撃たれて……」

店長が佐藤さんに双眼鏡を手渡す。店長は他の人にも、双眼鏡を出
す。こつちは普通に売つてる奴だ。

「ああ……あ？分かんないですか？ちょっとこの角度じゃ

「じゃあコッチ来て見て。あれはどつちだ？」

店長がいた場所に佐藤さんが移動する。

「もういいじゃないですか。どつちも死んでるわけですか？」

「夕さんがどつちも死んでたらOKしちゃ？とでも言つたげに、面倒

くせうつに双眼鏡を覗く。結構飽きやすいのかな？

「いや、そういう問題じゃないんだ。ゾンビになつて撃たれたのか、争つて撃たれたのか……分からないと危険だ。ただはつきりしているのは、店内の人達は銃を持つている事だよ」

「うーん……血が出ているけどなあ、ゾンビも血を流すよな……」

「見ているだけじゃ何も分かりません。いつその事誰か店の中入つたほうが良くないですか？あいつ等が来ても厄介ですし」

高橋さんが提案する。

「さつきの不良達がここを嗅ぎつけたらヤバイのは確かだ。しかし、この人數で店内に匿つて貰うとしても、迷惑がられるのがオチだな。食料だつてそんなに有る訳じゃないだろ？」「逆にこっちが分ける羽目になる。そくならない為にも、ちやけやつと必要なもんだけ取つて退散しよ？」「ばいばい」

佐藤さんはそう言い放ち、荷台からボウガンを取り出した。

「まさかそれで狙撃なんてするわけじゃ……」

「流石に元強盗の佐藤さんでもそんな事しねえよ。舐められないようを持つて行くだけだ」

「剛くん。もう行くのか？」

「そうします。早めに行つて、必要なものとつて帰りましょう。どうせあそこで籠城したつて、ジリ貧で食われるだけですから」

「あいつ等が嗅ぎ付けて来たらどうするんですか？あいつ等獵銃持つてますよ？」

「そん時は遠距離から狙撃してやるよ。どうせ有効射程距離外から撃つて来る輩。ボウガンでだつて返り討ちにしてやるぞ。そもそも長居はしないしな」

そつ自信満々に語りつと、佐藤さんはボウガンに矢をセットする。持つてているのは、ライフルストック型の180ポンドだろうか？通販じゃ引くのは苦労すると書いてあつた。佐藤さんは力を込めて一気に引く。これでは連射は無理だろう。一発きりだ。

「ようしー。じゃあ俺が偵察行つてくるから、あともう一人付いてきてくれ。その他は車を死守だ！」

「私は車見張つてる」

「じゃあ俺はここで」

「僕も見張つてます」

「私も武器を調整しておく」

「じゃあ俺は行きます」

偵察に立候補したのは、僕の友達の隆だつた。度胸があるな。

「偵察行くから、武！銃貸して！」

……そういう事か。納得した。僕は新しく入手した、P230JPを隆に渡す。出し惜しみは無しだ。

「これは8発入つてゐる。ここをこうして安全装置を外して、初弾装填はあるから、そのまま引き金引いてね」

「OK把握した。FPSとサバゲーでバッヂリ練習したから大丈夫。トリガーに指触れないんだろ？」

「ああ……うん！結構音と反動凄いから気をつけてね。銃口は味方に向けないようだ」

「分かつた！行ってくるー。おつさん行きましょーー！」

「おー！行くぞー！お前たち！後は任した！」

佐藤さんが立ちあがり、続いて隆も立ちあが……あれは……

「伏せて……」

僕が叫んだ次の瞬間、車のボンネットに弾丸が降り注ぐ……

「うお……」

車の陰に立っていた佐藤さんは、咄嗟に地面に伏せた！僕の目に映った人影は、間髪入れずにもう一発銃弾を浴びせる！

「糞つたれ！！！いきなり撃つてきやがった！！！」

「武が言わなきゃ危なかつたぞ！！」

敵が撃ち込んだ弾丸は、後ろの木に銃弾がめり込んだ。見てみると散弾だ。やっぱりあいつ等か！

「散弾です！あいつ等もう此処まで来ました！！」「伏せてろ！！」

僕達に向け、もう一発散弾が撃ち出される！二発目だ！！タイヤに当たつたらしい。弾ける音が聞こえた。

「今だ武！！撃て！！」

佐藤さんの掛け声と共に、僕は拳銃を構え車から身を出し
バン！！

「うお……」

僕は銃声に驚き、即座に頭を下げた！なんでだ！？猟銃の法律では、散弾銃は最大3発しか無理なはずだ！！……糞！分かつたぞ！！！

「あいつ等スペーサー外しやがったな！－！」

僕が気づいた時にはもう遅く、撃ち込まれた散弾が、車の陰に身を隠していた夕さんに兆弾した！

「キヤあ！－！」

夕さんは、左肩を抑える。見てみると、どうやら掠つたらしい、血が出ている。

「タ－！大丈夫だ！豆粒みてえな弾がちよつと掠つただけだ！！！マスター！手当てしてください！－！」

佐藤さんの指示で、店長が夕さんの手当てを始めた。この間、また一発発砲された。どうやら鳥撃ち用のバードシヨットらしい。ビーズみたいな小さな弾が、沢山飛んでくる奴だ。広範囲に当たるが、威力は小さい。しかも今は弾切れのはず！

「よくも夕さんを撃つたなあ！－！」

僕は車の陰から二コーナンブM60を出して、夕さんを撃つた奴に38スペシャルをお見舞いする！

パン！と乾いた高い音が響き、散弾銃の男は倒れた。

「うわしゃあ！－！胸にピンポイントに当たつてらあ！－！」

佐藤さんの歓喜の声と共に、僕は初めて銃撃した犯人の顔を確りと見る。どうやら心臓付近に当たったらしい。ピクリとも動かない。

「恨むなよ、これは正当防衛だ」

自分に言い聞かせるように、僕等を襲撃した男に言い放った。

これが人生で初めて生きた人間を殺した瞬間だった。

「コイツ……下つ端のタクミとかいう奴ですよ。いつもボスの傍にくつ付いてる」

高橋さんがまじまじと見ながらそつと語った。……あれ？

「なんで高橋さんは、下つ端の名前まで知ってるんですか？」

「ああ……僕はあそこの中学生だからね。皆しょっちゅう絡まれてたよ」

「そういう訳ですか……というか不良以外も居たんですね？あの学校？」

「実を言うと、俺も前に大人しくなった奴で……」

「ええ……」

そこに居る全員がびっくりした。ここにいる大人しそうな剣道部所属の兄さんが、元不良だったなんて……その細マツチヨな筋肉は、そのころ培つたのか。納得。

「あいつ等とは反りが合わなくて、一緒に居ることも無かつたですね。今じゃラッキーでしたけど」

そう言つて、僕が撃つた死体を見る。傍には銃撃に使つたであろう散弾銃のM870が置いてあつた。……あれ？ コイツは7発装填じや？ …… という事はあと一発残つていたのか！？ 命拾いをした……

「大丈夫ですかーーー？」

突然、店内から男の人の声が聞こえた。生存者だろうか。うかつに声出して、撃たれても知らないぞ。

その時、また銃声が響き渡る！ 店内からは悲鳴が聞こえた。しかし、ただの嫌がらせだったのか、遠くから車が走り去る音が聞こえる。

「あいつ等わざわざ遠くから見張つてたのか？」

「ははっ！ ……あいつ等仲間がやられたのに逃げてくれぞ！ ……薄情者めつ！ …！」

「元からこいつは鉄砲玉だつたとか？」

「そうかもな。まあ店内の人等は一応声掛けてくれたんだ。その返答は店の中でしようじやねえか」

佐藤さんは、落ちていた散弾銃を僕に持つよつに言つた。タクミといふ奴のポケットには、12ゲージの散弾が、たっぷり詰まつていた。

「これだけ有れば、当分は反撃できます」

「そうだな。汚れ仕事だが、これをうまく扱えるのは、今のところお前だけだ。これからもやつてくれるか？」

佐藤さんの真剣な面持ちに、僕はこいつ答えた。

「はーー！ これが僕に出来る事仕事ですので！」

そつ言つと、佐藤さんは何時もの楽しそうな笑顔で「頑張つてくれ！」といい、頭を撫でた。多分この人にとっては、今起きたこの事件は、予想の範囲内だつたのかもしれない。僕は散弾銃に弾を込めた。

散弾で、小さな穴が沢山空いた車を捨てた僕達は、荷物を持ち店に向かい歩き始めた。

駐車場での散弾銃の使用は止めてください。（後書き）

感想・アドバイスなど、よかつたら書いていてくださいね！

次回、新キャラ登場か？

糞つー！こんな所に居て溜まるとかーー！俺は帰るーー。（前書き）

今回はホームセンターの中とこいつらと。新キャラも出してもや。誤字・脱字などありましたら、見つけしだい修正・加筆していくますので。

糞つ！こんな所に居て溜まるか！！俺は帰る！！

先ほどの銃撃から身を守った僕達は、ホームセンターへ急いだ。

「おーい！開けてくれ！！食料を分けますから！..」

佐藤さんは、肩を抑えた夕さんを確り抱きながら、店のドアを叩く。夕さんの傷は、店長の緊急の手当てだけじゃ血が止まらない。夕さんとした止血をしないと止まらないのだ。店内に止血の包帯があるといいが。

「分かりました！今開けます」

店内の女性の声が、ドアの向こうから聞こえた。しかし、なにやら騒がしい声も聞こえた。

「何やつてる！！感染した奴がいたらどうするんだ！！！お前が勝手に決めるんじゃない！！！」

「皆で決めた事です！さっきまで撃ち合いに巻き込まれていた人達が助けを求めているんですよ！！邪魔しないでください！..」

「餓鬼の分際で口答えするのか！！貴様！！！」

「放してください！！年上だったら何か手伝つたらどうです！？」「何を貴様！..」

どうやら僕達の事で口論しているらしい。ガタガタとドアが揺れる中、店内への入り口が開いた。そこには、学生らしき女性と口論の相手である40代くらいの男性がいた。

「ありがとう！！！撃たれた女性がいるんだ！！手当てをしてくれ！..

！代わりに食料を分ける！
「分かりました！」ちに！？」

佐藤さんの表情が和らぐ。想像以上の出血に、驚いていたのだろう。
銃創は馬鹿に出来ない。

「ちょっと待て！！！本当は感染者じゃないのか！？」

「さっきの銃声聞いてなかつたんですか！私達人間が助け合わない
でどうするんですか！？」

男の怒鳴り声にも負けず、女性は夕さんと淡々と歩く。

「皆も来て！扉は閉めといて

「お邪魔します」

僕はそう言つと、久しづりにホームセンターへ足を踏み入れた。

「糞つー…どうなつても知らんからな！！」

さつきの男は、悪態をついてどこかへ消えた。

「気にしないで。あの人は加藤つて言つ口だけのオヤジだから。皆
は中央のスペースで待つてて。あと私は加奈。よろしく」

歩きながら自己紹介すると、加奈さんは医務室らしき所へ入つてい
つた。

加奈さんに学生らしき外見とは別の、確りとした雰囲気を感じた。
綺麗な茶髪で、ショートヘアのその姿は、とても可愛い。夕さんと
は違つたタイプの個性がある。三次元も捨てたもんじゃないと思つ

た瞬間だつた。

「なに見とれてんだよ！武！」

「いやつ！そんな事は！」

隆に冷やかされる。女子とはあまり話した事が無いのだから、見とれたつて仕方が無い。僕は隆とじやれ合いながら、皆と店の中心部へ移動する。さすが町一番を謳つてるだけあって、広い店内には様々な商品が所狭しと陳列されている。これなら今後の武器には困らないだろう。

僕達は開けたベンチが集まる場所に出た。試し切り？のスペースだろうか、鋸などが置いてある。

「ここで待つてるか。勝手に商品取つて面倒は御免だからな」「あ～あ！疲れた！！今日だけで一度も銃撃されましたよ…」「武！俺達が先に眠らせてもらつていいか？」「はい。交代で起こしますから、今は寝ていてください」「本当に悪いな。一時間後起こしてくれ。あと食料を加奈さんに分けてくれないか」「分かりました。一時間後起こします」

佐藤さんはベンチに横たわり、ぐっすりと眠る。今まで引っ張つてきて、疲れたのだろう。

気が付けば夕方だ。僕達は朝からずっと、戦火の中を駆け抜けてきたのだ。

皆が思い思いに休憩する中、僕は先ほど手に入れた散弾銃を弄くる。危ないので弾を出して、ガチャガチャとスライドを動かす。エアガ

ンとは違い、あまり力は要らない。素早く次弾を入れられるようにならねばならない。そこで、加奈は練習する。

「それってレミントン?」

後ろから声を掛けられる。加奈さんだ。手当でが終わつたのだろうか、夕さんも隣に居る。加奈さんは僕の隣のベンチに座つた。

「はい。さつきの不良から奪いました。弾付きで」

「……と言つことは、君が倒したの? その不良」

「はい。持つてた二ユーナンブで」

「弾はあと何発?」

「あと二発ですね」

「よし! それなら、弾薬の交換とこましょつか!」

加奈さんは立ち上がり、後ろの方へに向かつて声を掛ける。

「桜ちゃん! 弾薬箱持つてきて! …」

「分かりましたあー!」

ちょっとと間の抜けた声で答えるが、後ろから女の子が出てきた。

「この子は桜ちゃんね。私の趣味仲間。あとこれが私達の武器箱! 途中で拾つたり、色々苦労して集めたんだから!」

加奈さんが開けた金属製の箱の中には、仕切り別に違う種類の弾薬が入つていた! 今まででは考えられない拳銃弾の量だ! その他散弾や小包など色々入つている。凄い。どれだけの労力が掛かつたのだろうか。それくらいこの状態では貴重な物だ。

「凄いですね！まさか全部警官から？」

「拳銃用の弾はね。お陰で空の拳銃が一杯よ」

「散弾はどうやって？」

「獵師やら不良なんかから取つたの。さつきのあいつみたいなのが隣町とかにも大勢いてね……」

「苦労したんですね。……あの、もしかして隣町でサバゲーチームなんかやってたり……？」

「どうして知つてるの？……もしや対戦申し込んだチームの人！？」

「たぶん……。写真はゴーグルで分かんなかつたみたいですね」

「やっぱり生き残つてたの！？玩具でもサバゲーはやつとく物ね。これは間違いない」

加奈さんが約束の相手チームだったと分かり。僕達は話が進んだ。

どうやらあつちのチームは集合前にゾンビが発生して、バラバラになつてしまつたらしい。たまたま合流できた桜さんと一緒に、この辺で一番大きいホームセンターへ向かつてきたのだ。そこでもやはり不良共が暴れていて、そこで初めて警官から拾つた実銃を撃つたらしい。殺しこそしなかつたが、足を撃つたのでもうゾンビの仲間に入つているだらうとの事だつた。なんでも仲間達はそいつのことを見捨てて、車で逃げたらしい。それが先ほどのタクミとか言う野郎の集団だ。こっちに向かつて進んでいたらしい。もしかしたらもう一度来るかもしれないというのが加奈さんの予想だ。その為に武装を進めているのだと聞かされた。

「と、いう訳で、こつちには散弾のシェルが少ないの。代わりにリボルバー用の・38スペシャル。あとこれは貴重なんだけど、オートの・32ACP。これは弾倉付きで5発だけ。警官が使つたからね。銃本体は、レミントンのショットガン一挺、水平一連が一挺。オートのP230JP、あと空のリボルバーが7挺。でもリボルバ

一に弾入れると、このケースの拳銃弾がほぼ無くなってしまうの」「じゃあ、僕の12ゲージを半分渡しますので、38口径を8発いただけますか？」「

「それだけでいいの？」「

「予備に持つてるより、全部の銃に行き渡つたほうが効率いいですね。不良が来なければ木刀でだつて戦えますから」「

「そう。じゃあ弾込め手伝つてもらえる？」「

「分かりました」

僕はポケットから散弾を取り出し、ケースに入れた。半分といって元から30いくか行かないかだ。15発もあれば十分だろう。いざとなつたら加奈さん達も加勢するはずだから心配無い。僕は38口径の弾丸を8発貰つた。これで持つてる2発合わせて、5発弾倉を一回分装填できる。

「今は何時ですかね？」「

僕は加奈さんに聞く。実を語つと、今まで時計を見る暇も無かつた。腕時計はあまりしないので、時間が分からない。外は夕焼けに染まる。

「今は七時くらいね。夏だからまだ明るいけど」「

「そうですか。何だか一日が長く感じました。初めて銃も撃つたし、なんだか人生初が多い日です」

「今の内に体力を付けないと、後で辛くなるわよ。今日みたいに少數で攻めてくるとは限らないから。私が見張ってるから今は寝ていいよ」

僕は加奈さんの言葉に甘え、少し仮眠をとることとした。

「隆。後はお願ひ

持っていたM870を隆に渡し、僕は目を閉じた

「……ああ……だから……の……俺は……無い……」
「何言つて……しんじ……やめてくれ……もう……」
「ううん?」

僕は目を覚ました。何やら揉めているらしい。ギャアギャアと五月蠅い声が聞こえる。周りには交代したのだろうか、隆が寝ていて佐藤さんが居なかつた。一時間も寝ていたのか?置いてあつた散弾銃を持ち、スライドを静かに引く。赤いシェルが排莢される。薬室に入つてたのか。また込めなおす。

「信用ならない……あいつ等なんて……」

一旦静かになつた空間に、また五月蠅い声が響く。勘弁してくれよ。
僕は散弾銃を持ち、口論現場の裏に回る。

「食料をわける！？あいつ等が持つてきたのは水と菓子パン位だぞ！？それに不良共と撃ち合いなんて！こっちに迷惑が掛かるだろう！？店内に入れるなんて何考えてるんだ！？」

「水分とパンがあれば上等じゃないですか！？貴方はどこまでクズなんです！？同じ人間が食料をわざわざ渡しているのに！…選り好み出来る状況だと思ってるんですか！？」

「うるさい！…私は小麦アレルギーなんだ！…パンなど食えるか！…！」

「なら食べなければいいでしょ！？貴方の事情でここに来た人たちの事を追い出すなんて出来るわけ無いでしょ！？考えてみてください！…世界中がこういう状態に……」

「黙れ！…」の小娘があ……」

加藤という男が拳銃を突きつけた！…不味い……

「動くなあ！……糞つ 垂れえ！……」

下手に眠つたせいで、寝起きは最悪だ。言葉遣いも悪くなる。僕はこの加藤？だかいう男の頭に散弾銃を突きつけた。

「銃を投げ捨てる！…床にその頭擦り付けて伏せるんだ！……糞野

郎が！……」

「…」の餓鬼い！……舐めやがって！……」

なにを思つたか、僕が散弾銃を確り頭に照準しているにも関わらず、この男は銃を捨てずにこちらへ向けようとした。僕はコイツを殴つ

た。

「ぐおつ……」

まるで半世紀前の射撃方の用に、片手を伸ばして銃を構えていた、隙だらけの男の顎に向かつて、ストックの底で打ち付けた。持つていた拳銃は、後ろへ飛んだ。コイツは舌を切つたのか、口から血が出ていた。

「ぐくえあうべ……つがは……お前……何したか分かつてんのか!? 貴様……！」

「拳銃向けてた男の顎に、一発食らわせただけですよ。つたぐ！」

僕は本当に機嫌が悪い。特にどうたらこうたらでなんやかんや突っかかつてくる奴は最悪だ。ぶ千切れる。特に寝起きは。だから人前で寝られないんだよ。

「つかは……見てみろ……血が出たぞ……お前どうなるか教えてやろうか!? 僕は元政治家だ……コネだつてある……救助が来たらお前だけ置き去りにしてやる……！」

「コイツ……救助なんて来ると信じてるのかあ？ 武よ？」

「佐藤さん。どこに居たんですか？」

佐藤さんが話しかける。その手には見慣れたマチエットを持つている。通販で買おうか買つまいが迷つっていた奴だ。

「ちよつと探索してたらこの蟲ムカシだよ。もうちよつと早く来てりやお前の勇姿でも見れたかな？」

「佐藤さん。そのナタ一本貰えますか？ 前から欲しかった奴です」

「ああ。沢山有つたからやるよ。それよりだ。そこの奴！」

「なんだ！！この押し掛け野郎が！！！お前も一緒に見捨ててやるうか！？ああッ！！」

「黙れ。恫喝なんてこの世界じゃ通用しない。それに見合つ武力がなきやな。それにお前に見捨てられる程困つてないぞ。政治家さんよお」

佐藤さんは手に持つたナタを僕に渡すと、腰のポーチから手錠を出した。

「こんな事に使うだらうと思つたぜ。つよじとおー。」

加藤の腕を背中に回し、手錠を付けた。必死に抵抗する加藤を、佐藤さんは力でねじ伏せた。

「加奈さん。なんか個室ありませんかね？できれば窓の無い部屋」
「……使ってない収納スペースなら有りましたが。畳一畳位の」
「よし！そこへ連行だ！！カツとなつて銃振り回す奴を野放しには出来ませんよね？加奈さん？」
「ええ。反省してもらいますか」
「くつそ！—覚えてろよー！—貴様等あーーー！」

そう捨て台詞を吐くと、佐藤さんに片足を引っ張られて、加藤は引きずりれる。隣の加奈さんは「反省してください」と呟いていた。僕は弾き飛ばした拳銃を拾う。

「コイツは何処で拳銃を？」

「多分ここへ来る前に」

「コイツが威張つたのはそういう理由でしたか。今まで撃たなかつたのが不思議ですね」

「皆が休憩している夜を狙つたんでしょう。もつと警備を強化しな

きや
ね

「どうせ撃つても仇討ち合戦が始まるだけなのに……」

「そうね。これは銃で解決する問題じゃ無かつた。問題ですら無かつた。只それだけ」

加奈さんは、佐藤さんと共に向こうへ消えていった。小麦アレルギーは大変だと聞くが、この非常時ではもっと大変だろう。しかし、それをケアする病院は今はもう機能していないだろう。アレルギーの人には悪いが、仕方の無いことだ。

この騒動は、店内の人々に知れ渡るだろう。加奈さんの話では、この店には、従業員あわせて30人程度が居たらしい。僕達あわせて35・6人という所か。これからはどうしたものか。

僕は拾つた拳銃をポケットに入れ、また眠りに付いた。

糞つー！こんな所に居て溜まるかー！俺は帰るーー。（後書き）

感想・アドバイスなど、良かつたら書いていいでございー！

次回は、敵襲来！？

異常な世界の 感覚（前書き）

今回は、店内での攻防戦と、こんなになつちやつた世界の価値観？とかの違いを書いてみました。異常な世界で、武達は生き残れるのか？

誤字・脱字は見つけ次第修正・加筆していくます。

異常な世界の 感覚

「起きろおーー武ーー」

「うそーなぜーー何ーーはーー?」

僕は起きた。しかし、自宅の布団の中ではない。ここは確か……

「地獄の戦場だあーーーーゾンビ共が駆けつけたーーー寝てている暇は無いぞーーーー新兵ーーーー」

鬼軍曹よろしく隆に叩き起された僕は、渋々ながらベンチから起きる。店内には人々の声が響く。

「そこ」にバリケードをーーーゾンビ達を入れないでーーー

先頭で指揮をしているのは、加奈さん率いる僕がコンビニで出合った仲間達だ。その他にも店内にいた大人達も手伝っている。

「釘打ち機で止めようーーーその方が早いーーー」

「資材持つてきてくれーーー」

「俺は二階からボウガンでゾンビを撃つーーー」

「皆頑張つてーーーー」

「糞つーーー数が多すぎるーーーー」

僕も協力しようーー傍に置いてある散弾銃を手に持ち、駐車場側出入り口に向かう。

「遅れてすみません……」

「武くん！大変よ！ゾンビが多すぎる……」そのままではここは破られてしまう……」

「どうすれば……？」

「そっちの階段から一階に登ると、隣の棟へ通じる渡り廊下があるの……、その窓からショットガン

を撃つて……隣の棟は人が居ないから、あいつ等を引き付けて……！」

「分かりました……」

僕は直ぐに階段を駆け上ると、隣の棟へ繋がる渡り廊下を走った！なるべく遠くに引き寄せるため、隣の棟の近くの窓から散弾銃を出す。

「スタンバーイ！スタンバーイ！」

僕そう念じると、入り口に群がるゾンビ共に、向けてOOBACKダブルオーバックの散弾を放つた！大きな音を発しながら、二体のゾンビの頭に命中した。しかし、ゾンビ共は数体がこっちへ来ただけで、その他の奴等は見向きもしない……糞つ……！」

「こっちに来て……こっちだ……！」

僕はもう一発撃つと、またゾンビの頭に当たる。群がつてるので何処でも当たる。上からなので頭を狙うのは簡単だ。しかしそまだ来ない……目の前の大勢の人間に夢中なのか！？これじゃあ話にならない！僕は皆が居る棟に戻った。

「全然引き付けられません……もう銃声は聞こえました……正面か

「あらあ……！」

「やれやれ……！」

「外は地獄だぞ……！」

「撃ちまくれ！……！」

加奈さんの合図で、バリケードの隙間。銃眼から銃弾が発射される！

「そんなの役に立つの……？」

「弾の節約です……！」

僕はバリケードの上から特製薙刀を振り下ろすと、ゾンビの頭は割れた。腐っていたのか、ドロドロの肉片がナタに付く。

「畜生！ナタは使い捨てかつ……このゾンビめ……！」

僕はゾンビの頭から特製薙刀を抜くと、今度は水平に突き出す。ゾンビの首に刺さった。横へ引くと、ゾンビの首は皮一枚だけしか繋がつてなかつた。そいつは崩れる。

「大分減ってきたわ……これなら槍だけで倒せる……皆銃を仕舞つて……！」

「どっちにしろもつ弾は少ないからな。結局は己の力に限る……！」

ガタイの良い土方風の男性はそう言つと、自作したであろう鉄パイプにナイフを付けた槍を使い、ゾンビに刺した。突き方からして素

人じやないよ…… ムキムキのその腕がテンポ良く動く。この人は銃剣道でもやつてたのだろうか？

そうしてあつとこう間にゾンビは倒された。残っているのは、新たに来た数体のゾンビだけだ。

「こんだけ減らせば、もう今日は安心ね。バリケードを組みなおしましょう！－皆手伝つて！」

加奈さんは元気良く声を掛ける。しかし皆はへろへろだ。

「ほんのが毎日続くのかよ！－…… 食べ物だつて無いし、俺はもう出させて貰うよ」

「でも…… 外は危険ですよ？」

「ここだつて何時まで安全か分からねえ。好きにさせてやんな。譲ちゃん」

「…… そうですね。自分の進退は自分で決めてください」

ガタイの良い男性が加奈さんを説得した。汗を流し、釘を打ち付けているその姿は、正しくプロの大工だ。しかも渋い声で、人情感溢れる良い人っぽい。僕はこの人を親分と心の中で言おう。

「親分！ こつちはどうしましようか？」

「そつちの壁は釘が刺さらねえ。土嚢でも積んでおけ」

「分かりました親分！」

「親分！ 渡辺がもうここから出たひつて言つてます－ビうしまじょう？」

「構わん。好きにさせてやれ」

「分かりました！ 親分！」

えええ……親分つて呼ばれてるよ。めった呼ばれとるよ。どうやら本当の大工らしい。子分が周りを固めている。一見ヤクザの集まりみたいだ。

「武一、ちょっとこっち来い！」

佐藤さんに呼ばれた。どうやら皆集まってるらしい。行こう。

「ここの抜けたい。と申し出た人は今のところ5人です。逆にここを出たくないという人も居ます。強制はしませんので、各自見の振り方を考えておいてください！以上です！」

加奈さんがそう言つと、周りの人達はそれぞれ定位置に戻る。店内には少數グループがいくつかあるのだ。大抵気の合う人や、知り合いなどと一緒に行動している。

「どうしようか？俺等はここに長居する予定も無い。どこか安全な所へ移動でもしないと」

「前に船で自給自足とか言つてましたけど、どうなんですか？」

「考えてみたが、この人数を養つていいくには自然栽培じゃ足りない。今ある食用を足しても、一週間と持たないだろうな。それに年がら年中取れるわけじゃない……。言い出しどうすまん。安易だつた」「それじゃあこの後どうするの？監視の手の状況詳しそうだけど、何か良い考えある？」

夕さんの問いかけに、一同策を練る。

「うーん。下手に想像してあるだけであつて、実際にどういふできる提案も無いな」

「『J』の手のゲームは、主人公は免疫とか耐久とか有って、プロの軍人とかだからね……」

「『J』の後永遠にこういう状況が続くんだもんな……セーブして一時離脱もできない」

「護身具売つて経営しているけど、ゾンビ相手じゃ厳しいな……せめて弾薬を補給出来たらなあ」

「銃が有ると無いとじゃ生存率がケタ違いですよね。映画の死亡フラグなんか役に立ちません?」

僕がそう提案するも、出でくるのはネガティブな事だけだ。

「まずは……そうだな、立て籠もると確実にやられる」

「窓際に立つとゾンビに引っ張り込まれたり!」

「そうそう! あと下手に銃があると、弾切れで食われる。特にはしゃいでる不良なんかはまさしくそれ」

「大体、主人公よりも出しゃばると死ぬな。もしくは自分を犠牲に死ぬか」

「皆やめてよ。超暗いじゃん。お先真つ暗感が漂つてるよ!-!-」

「だつてなあ……ゾンビゲーの楽しみって、謎解きか無双してるときでしょ?」

「馬鹿つ! 弾を節約しながらの イオ ザードなんて最高だぞ!-!- ット イジング何かよりスリルがある!」

「…………らあ!」

「いいじゃないですか!-!- ット ラだつて!-!- あの最強主人公でゾンビ共を可哀想な位無双するのが楽しいんです!-!-」

「…………な……いよ!-!-」

「強いだけが主人公じゃないぞ! 隆!-!- 中には普通の学生とか……つて五月蠅いなあ!-!-」

「…………らあ!-!- い!-!- おらあ!-!-」

窓ガラスが割れた。突然だ。窓際には不良らしき人物がガンを飛ばしながら立っていた。

「糞つ垂れ！！！大事な話をしている時にい……」

「敵です！！！あいつ等が来ました！！！」

「分かつてん！！！殺してやらあ！！！」

佐藤さんは僕から散弾銃を奪い取ると、外へ向けて発砲した！！

「お前等いいかげつぶ！！！」

金髪不良の右手が吹つ飛ぶ。金髪は窓から崩れ落ちた。

「うあああああああ！！！！！」

「手前え！！！よくもぶお！！！」

今度は隣の不良に撃つた！喋り掛けのその口に、散弾が貫通する。頭が吹つ飛んだ。周りの奴等もいまさら隠れる。撃つてこないと思つたのだろうか？馬鹿すぎぬ。

「糞おおおー！！！話し合にに来たんだー！！！何で撃つたあー！！！」

右手がお無くなりになつたパツキン男児を、庇いながら、今度は赤髪の男が叫ぶ。

「昨日のお釣りだよ」

佐藤さんはそいつの顔に向かつて撃つた。一瞬に頭が移動した。普通の体では有り得ないスピードだ。千切れて飛んだ。

「手筋ええ――――手筋――――。」

今度は黒髪の男が身を乗り出す。散弾で左手が飛んだ。右手に持つていた猟銃が放たれる。僕のすぐ横を撃ちぬかれた。

「止めてください！…佐藤さん…」

高橋さんが止める。

「あいつ等だつて、そんなに悪いわけじゃないんですよ……心は腐つてしまん——！」

「なんだ？俺の心は腐ってるってか？」

「鉄砲玉は帰つてこない！あいつ等も帰れない！！！」

佐藤さんは、天井に向かつて散弾銃を撃つた。

「なにを!?

「尻尾巻いて逃げろ!! 地べた這いづくばつて帰れ!! やり直すんだよ!!!! こんな世の中になつたんだよ!! 良い事してみろ!!!! 必要な時だけ頼るんじゃ無いつ!! もう一度人生やり直せ!!!!」

佐藤さんは叫んだ。

しかし、その返事は銃弾だった。佐藤さんの上方を掠める。

「うおっ！！」

「それがお前の生きる道か！……残念だよ」

まったく動じなかつた佐藤さんは、確りと散弾銃を構え、撃つた。それを見ていたのか、店内からも悲鳴が上がる。

「なんて事！彼は話し合いに来たのよ……この野蛮人！……！」

「そうだそうだ！！！」

「止めてください！彼はここを守るために……！」

「守るために殺すのか！？狂ってるぞ……君……！」

「話し合いなんて！武器を持ったチンピラに集られるのがオチです！！」

「平和的に解決できただろう！……人間は平等だ！！！人権がある！！犯罪者だからって撃つんじゃない！！！」

「そんなアホな！兄ちゃんは押し掛けた犯人を撃つただけだろが！」

「あんただつて！サラリーマンにもならないで土方の仕事してるじゃない！！！同類よ！！！」

「土方じやねえ！！！大工だこの婆あ！！！」

「なによ……貴方！！私を誰だと……！」

加奈さんや、大工さん等が加勢する。しかしながら、佐藤さんは非難されている。当たり前だ。やりすぎでしょ。僕は佐藤さんの手を引いた。

「行きましょう。佐藤さん。今が潮時です」

「そうだな。行こうか」

「武君…行くの…?」

「はい。もうここに居る理由なんてありますません。庄いいく理由ならありますけど」

「駄目! 今は当然の事よ! …昨日撃つて来た奴等でしょ! …? 話し合いで来たつてそりや撃つよ

!…」

「いいんです。今回また騒ぎました。また何処かで会いましょう!」

「そんな!」

そんな中、僕達は、荷物を揃えた。準備は万端。心残りも無い。
この間にも罵られる。この間の加藤か? もう開放されたのか。

「一度と帰つてくるな! !」

「分かりました。もう一度と来ません」

佐藤さんを先頭に、僕達は店を出た。

「待つてください! !一緒に連れて行つて! !」

加奈さんと桜さんだ。来たつて良い事ないよ?

「あんなの可笑しい! ! いまさら平等だの平和だの…この暴力に
満ち溢れた現実を見たくないだけです! !」

「あれが平常な感覚なんけどなあ?」

「あの頃の平常や日常とは、もつ違います。これからはこの世界の
平常です」

「まあ良いじゃないですか! 女の子が増えますよ! . . .」

「やうか? …そんなら行くつか」

「え……そんな理由で」

「気にしない気にしない！…」

隆の言葉で、少し明るくなつた。

異常な世界での、ちょっとばかりの問題だ。僕は思つ存分銃を握りしめよ。」

僕達はこの前の車に乗つた。エンジンはまだ掛かるらしい。さすが日本車だ。

「行くぞ諸君！…」の先は地獄だ！！不条理と暴力が満ち溢れている！！！見失わないよう手を繋いだけ！！

「ハツハーン戦場は地獄だぞ！…ヒヤツハーン！…！」

一同を乗せた車は発進した

異常な世界の 感覚（後書き）

感想・アドバイスなど待っています！

キャラクター紹介だ！随時更新中！（前書き）

一応これまでのキャラクターを紹介します。

一度には書けないので、後から追加していきます。

キャラクター紹介だ！隨時更新中！

一色武 いつしきたける • 主人公。中三の男で、元ひきこもり。

• 軽度の銃オタ。

• これまで一人の人間を射殺してい

る。ゾンビは数体。

鈴木隆太 すずきりゅうた • 武の友達で、数少ない親友。

• 趣味はFPSとサバゲー。

• コツチはFPS厨。

佐藤 さとう

• 下の名前は不明。

• リーダーシップがあり、皆を引
つ張つていく。

• 時々熱くなり過ぎるのか短所。

• ゾンビ映画が好きらしい。

山田太郎 やまだたろう • 所謂コンビニ店員。

• 最近は影薄い。
• 趣味は漫画で、絵が上手い。

西野夕 にしのゆう • 高校生の女子。

• 長い黒髪が特徴。
• 見た目に反し、結構喋る。

高橋 健太
たかはしけんた

・高校生の男。

・剣道部所属。

・昔はヤンチャだったらしい。今

は大人しくなった。

加奈
かな

・

キャラクター紹介だ！隨時更新中！（後書き）

後で追加・修正します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8243y/>

リアルサバイバルゲーム

2011年12月1日18時52分発行